

令和2年度 第1回特集展

# 疫病・病魔～先人達の闘い～

開催期間 令和2年9月1日(火)～令和3年1月17日(日)

## 「信仰」と「医療」－主な展示品のご紹介－



加藤清正木像 (当館蔵)



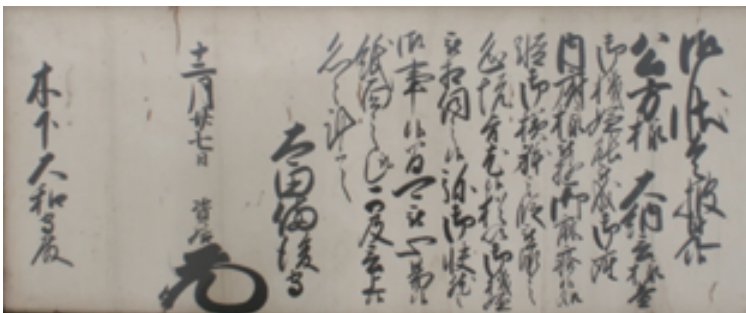
伝龍虎圓葉籠・龍虎圓包紙 (当館蔵)

## 第1部 麻疹にかかった将軍世子

麻疹(ましん・はしか)は、感染力が極めて強い疫病として知られています。江戸時代には麻疹の大流行が13回もあったとされ、麻疹のために命を落とした人が多かったようです。

「太田資始書状」には、天保7(1836)年に当時の将軍世子であった徳川家慶も麻疹にかかっていたことが記されています。世間とは隔絶された江戸城の奥深くで暮らしていた徳川将軍家であっても、疫病の流行とは無関係ではなかったのです。

「麻疹略説」は、病名の由来から治療方法に至るまで、麻疹に関する詳細な情報を収録した江戸時代の医書です。この医書からは、麻疹の流行に正面から立ち向かった当時の医者たちの闘いの足跡をたどることができます。



太田資始書状 (当館蔵)



麻疹略説 (当館蔵)

## 第2部 傷寒～江戸時代の流行病～

### (1) 愛宕神社で起きた奇跡～愛宕勝軍地藏尊と瞽者放明碑

愛宕神社(日出町大神)は、愛宕勝軍地藏尊(「将軍地藏尊」とも)を祀る神社です。その境内には、日出藩主3代木下俊長によって宝永2(1705)年に建立された「瞽者放明碑(こしゃほうめいひ)」があります。その碑文は俊長の依頼を受けた人見桃源(幕府儒官を務め、俊長が師事・親交した人見竹洞の子)が作成しています。

碑文には、北大神井元(現在の大神地区字井ノ本)の出来蔵という農民に起きた愛宕勝軍地藏尊の奇跡について記されています。傷寒を何度も患った出来蔵は愛宕神社をあつく敬い、神社での参籠の末に視力を取り戻すという奇跡が起こります。出来蔵はこれを、愛宕勝軍地藏尊の霊力によるものと感謝したとあります。この奇跡を耳にした俊長は、江戸幕府に報告したと伝えられています。



愛宕神社(大神)



瞽者放明碑

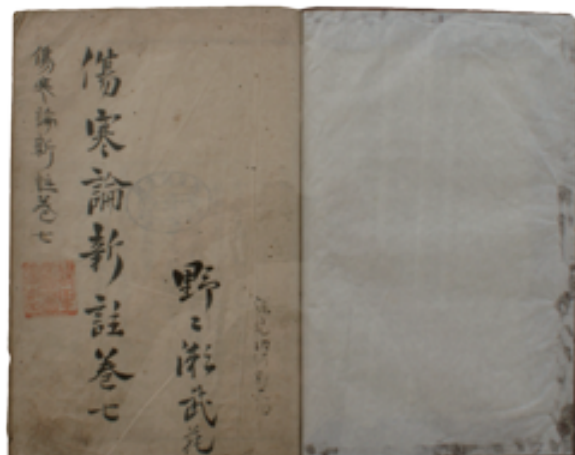
### (2) 「傷寒」に立ち向かった帆足万里とその門弟

江戸時代後期、日出藩では帆足万里やその門弟たちによって医学が盛んになります。帆足万里が著した「医学啓蒙」の冒頭には、友人賀来有軒から息子の佐之に医学を教える様に託された経緯が記されています。この時、万里は医学を学んではいませんでしたが、医学を学びたいという弟子を得て、はじめて万里自身も医学を学び始めたのです。

その様な形で始まった医学教育でしたが、結果として万里の塾からは日野鼎哉や小田魯庵をはじめとして、全国でめざましい活躍をした医者が数多く巣立っていきました。



帆足万里「医学小補」(当館蔵)



野々瀬武蔵(写)「傷寒論新註巻七」

## 第3部 疫病神への信仰

日本では、疫病退散のために疫病神（えきびょうしん）を祀る信仰が盛んに行われました。当時の人々は、神に祈りをささげて祭礼を行うことで、疫病の流行に対する不安や恐怖からの救いを求めていたのではないかと思います。

### （1）藤原広嗣と鏡宮～怨霊から疫病神に～

当時、天災や疫病は怨みを抱いて非業の死を遂げた人間の「怨霊」によってもたらされると信じられていました。そのため、祭礼を行い神（「御霊」）として祀ることによって怨霊を鎮め、天災や疫病などの禍から免れようとしてきました。これを御霊信仰と言います。

八津島神社に合祀されている「鏡宮」は、朝廷に対する反乱に敗れて非業の死を遂げた奈良時代の貴族である藤原広嗣を祀っています。怨みを抱いて亡くなった広嗣の怨霊を鎮めるために建立されたのが「鏡宮」であり、後世には疱瘡守護の疫病神としてあつく信仰されたと伝えられています。



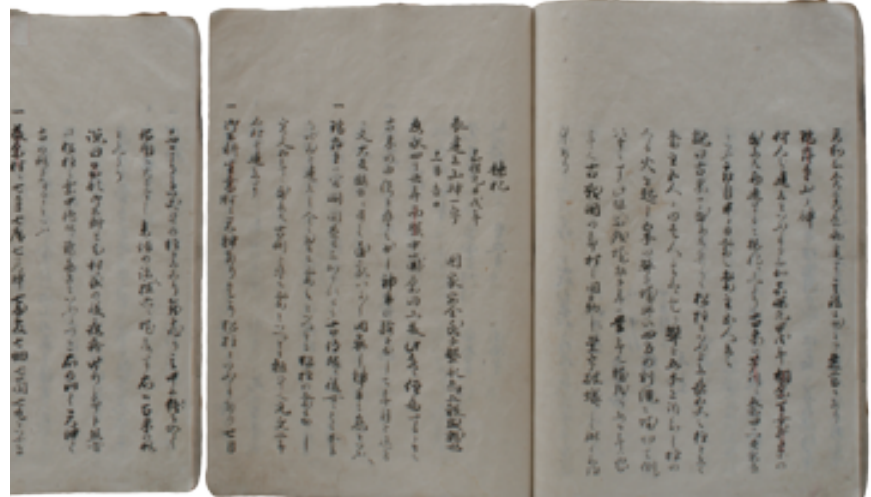
八津島神社



鏡宮

### （2）『南藤原図跡考』と「松柱」

『南藤原図跡考』には、瑞巖寺山ノ神の社と生桑村の天神社（現在の杵築市）で行われた「松柱」という疫病退散の祭礼について記されています。瑞巖寺山ノ神の社で行われた「松柱」は、5丈（約15m）もの長さがある柱の上に人が登って5本の御幣を立てます。人が柱から降りた後に柱を支えていた綱に火を放ち、柱が倒れるまで待ちます。柱が倒れたら5本の御幣を確かめ、御幣の焼け残り具合によってその年の豊作・不作が占われたと伝わっています。生桑村の天神社の場合は2丈もの高さがある柱の上に糠を入れた籠を吊るし、参拝者たちはその籠をめがけて火のついた松明を投げ込んで柱を焼き倒します。地域によって祭礼の姿は異なりますが、疫病退散にかける人々の願いは共通していたのです。



『南藤原図跡考』（「松柱」の記述）

### (3) 疫病神清正公とその信仰

古来から日本には人を神として祀る風習があり、豊臣秀吉子飼いの家臣である加藤清正も神として祀られた一人です。コレラが大流行した幕末期には、コレラ封じの神としての「清正公信仰」が盛んになります。日出城下町の旧家に伝存していた「加藤清正木像」(当館蔵)の厨子には、コレラが流行した年である文久3年(1863)の年記が入っており、日出藩においても清正をコレラ封じの神として敬われた、ということかもしれません。

## 第4部 龍虎圓～日出藩木下家に伝わる漢方薬

### (1) 豊臣家ゆかりの秘薬「龍虎圓」

日出藩木下家代々の秘伝とされた龍虎圓は、豊臣秀吉が典薬達を集めて調剤させたと伝えられる漢方薬で、日出藩主初代木下延俊の治世にあった慶長18(1614)年には確実に存在しました(「慶長18年日記」)。別名「小児神劑龍虎圓」とも称され、小児用の薬でもあったようです。明治以降は、「秀吉から木下家に伝来した秘薬」という謳い文句を載せた広告が作られ、木下家ゆかりの家紋である「独楽紋」を押印した紙に包んで販売されたとみられています。



龍虎圓広告(明治時代以降)

### (2) 「龍虎圓」の処方箋

『日出町誌』史料編には龍虎圓の処方箋が収録されており、「全蝎」(ぜんかつ、サソリを原料とした生薬)や「龍腦」(りゅうのう、東南アジア原産の生薬、別名「ボルネオール」)など、外国でしか取れない高価な漢方薬も使われていたことが記されています。「伝龍虎圓薬籠」(当館蔵)には、龍虎圓用の生薬や調合用の道具類が収められていたと考えられています。薬籠に収められた道具には、朱色の粉末が付着しています。当時、朱色は疫病除けの霊力があると信じられており、疫病の薬を調合した跡なのかもしれません。

また、薬籠には木下家ゆかりの「独楽紋」の印章が納められており、包紙に押印したものとみられ、木下家と龍虎圓との深いつながりをうかがわせます。

#### 日出町歴史資料館・日出町帆足万里記念館

##### 【開館時間】

9:00～17:00 ※入館は16:30まで

##### 【休館日】 ※臨時休館の場合あり

月曜日(祝日の場合はその翌日)

年末年始(12月29日～1月3日)

##### 【住所・連絡先】

速見郡日出町2602番地1

TEL0977-72-6100 FAX0977-72-6103

